高知県立坂本龍馬記念館だより　2021（令和3）年10月　第119号

高知県立坂本龍馬記念館　The Sakamoto Ryoma Memorial Museum

飛鳴（ひとう）

海援隊旗（二曳きの旗）

http://www.ryoma-kinenkan.jp

南船　NANSEN　HOKUBA　北馬

特別展

「龍馬と北の大地」展はじまります

いよいよ、令和3年度の特別展がはじまります。今年の特別展は、開館30周年を記念したものです。当館初の試みとして、二部制を採用しました。その名も「龍馬と北の大地」展。第一部が蝦夷地に向けられた、龍馬をはじめとする江戸時代の人々の様々なまなざし、第二部が近代の北海道を舞台に、開拓民として、そして画家として生きた坂本直行の作品と思想を紹介する、全体で半年間に及ぶロングランです。ぜひご覧ください。

その第一部が、10月5日から12月3日まで開催する「蝦夷地へのまなざし―龍馬と幕末の志士」です。その見どころを、3人のキーパーソンを取り上げて紹介します。

「北海道人」松浦武四郎

北海道の名付け親――誰のことか分かりますか？明治2（1869）年、蝦夷地からの改称を目指した政府の命を受けて、「北加伊道（ほっかいどう）」の新名称を提唱したのが、松浦武四郎という人物です。最終的に漢字を改めて「北海道」となりますが、この事績により武四郎には冒頭の称号が与えられています。

武四郎は、一人の志士として3度、幕府の「御雇」として3度、江戸時代の蝦夷地を探査しました。蝦夷地の地理に精通し、アイヌの人々の生き方に感銘を受けた武四郎は、それらを著作にまとめ、その多くを出版しました。当代随一の〝蝦夷地通〟として、影響力は絶大でした。

武四郎には、探検家・志士・作家・画家・出版人・蒐集家など、実に様々な側面があります。今回、三重県松阪市にある松浦武四郎記念館の全面協力を仰ぎ、武四郎の関係資料を多数展示して、その魅力あふれる人生を紹介します。

本展のキーパーソンの一人松浦武四郎（松浦武四郎記念館所蔵）

北添佶磨の活躍

幕末の有名事件「池田屋事件」を思い浮かべてください。主役はもちろん新選組。池田屋に踏み込んだ近藤勇は、浪士が2階に集まっているとみるや階段を駆け上がり、ちょうど様子を見に出てきた一人の浪士を斬り伏せる。斬られた浪士は、そのまま階段を転げ落ちた――有名な〝池田屋の階段落ち〟のシーンです。〝階段落ち〟は後世の創作ですが、この〝斬られ役〟、実は土佐藩出身の浪士だったのです。その名を北添佶磨といいます。

北添佶磨には非常に大きな事績があります。池田屋事件の前年の文久3（1863）年、佶磨は数名の仲間と共に船に乗り、日本海を北上しました。目的は、蝦夷地の視察です。この時北の大地を実見した佶磨が、その大いなる可能性を龍馬に伝えたとも言われます。本展では、〝斬られ役〟を脱却した佶磨の志士としての姿を明らかにします。

坂本龍馬の蝦夷地への思い

そしてもちろん外せないのが、龍馬です。龍馬が蝦夷地開拓構想を抱いていたことをご存じの方は多いでしょう。龍馬の蝦夷地行きは結局夢と終わりましたが、遺された手紙のなかで、龍馬が蝦夷地に言及したものが4通あります。本展では、その4通すべての真筆を展示します（一部資料は複製展示の期間あり）。手紙に認められた内容を紐解き、龍馬の蝦夷地への思いに迫ります。

さらには、直接会ったことはなくとも「先生」であった松浦武四郎、先に幕末の北の大地を踏んだ「同志」の北添佶磨が、龍馬にとってどのような存在であったのか、幕末の志士達の様々な形でのつながりを、資料を通じて紹介します。

高山 嘉明

「坂本龍馬記念館の軌跡 ―出会いの奇跡をたどる」展を振り返って

開館30周年を記念した本展は、所蔵資料を通じて30年を振り返る構成とした。資料との出会いは人との出会いであり、この30年間には多くの人との出会いがあり、その方々に館の運営を支えていただいた。本展はこうした方々への感謝の気持ちを込めた展示であるとともに、当館の資料の中でも選りすぐりの資料を展示することで、一般の来館者の方にも楽しんでいただくことを目的とした。

通常の展示では、隣り合う資料に関連を持たせ、歴史の流れを解説パネルで補いながら、資料が持つ意味を深く理解できるように展示を行う。本展では、資料が当館へ収蔵された順番に展示を行ったため、隣り合う資料に関連性を持たせられなかったが、解説パネルでは、普段紹介することがない資料の来歴を紹介した。

例えば、荒尾親成氏から譲渡していただいた「慶応3年11月13日陸奥宗光宛龍馬書簡」（現存する最後の手紙）の場合、陸奥から加納宗七に譲られ、荒尾親成氏を経て当館へ収蔵された。

また、北川竹次郎に宛てた中岡慎太郎の書簡は、北川家のご子孫と初代館長の小椋克己氏に親交があったことから、ぜひ坂本龍馬記念館で活用してほしい、ということで寄贈してくださった。

さらに、武市半平太の書簡3点は、半平太が切腹をした際、介錯を務めた甥の小笠原保馬のご子孫の家に長らく保管されていた。そのご子孫の方は、当館の2代目館長である森健志郎氏と中学時代にテニスのダブルスを組んでいた御縁で、半平太の書簡を当館へ寄贈してくださった。

様々な人に支えられた30年であり、今後もこうした御縁を大切にして、さらなる発展ができるよう努めていきたい。

三浦 夏樹

軌跡展の様子

「開館30周年記念・龍馬真筆書簡特別展示」について

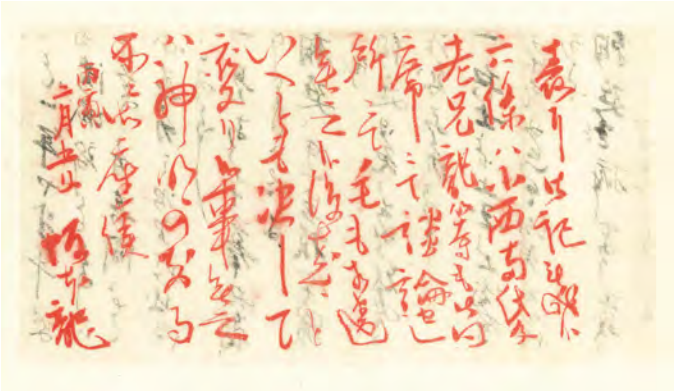
前期：令和3年10月9日（土）～10月30日（土）　※薩長同盟の表書を展示
後期：令和3年10月31日（日）～11月21日（日）　※薩長同盟の裏書を展示

当館にとって京都国立博物館所蔵の龍馬関係資料と、宮内庁書陵部所蔵の木戸家文書の中にある龍馬書簡10点をそれぞれ借用し展示することは、開館以来の積年の思いであった。京都国立博物館所蔵の龍馬関係資料については、令和元（2019）年に展示することができたので、このたびの特別展示では、もう一つの念願であった宮内庁書陵部所蔵の薩長同盟の裏書を含む龍馬書簡10点を展示する。

当館の開館以来、この30年間で宮内庁書陵部の木戸家文書が高知県で展示されたことは2回あった。その2回とも会場は高知県立歴史民俗資料館だった。最初は、平成19（2007）年の特別展「3館合同企画　暗殺140年！　坂本龍馬・中岡慎太郎展」で、2回目は平成22（2010）年NHK大河ドラマ『龍馬伝』に合わせた特別展『龍馬伝』展である。2回とも企画委員として当館職員が関わったものの、まだ新館のなかった当時は、当館を会場にはできなかった。その上、2回とも薩長同盟の裏書は他所での展示と重なり、借用できなかった。こうした経緯もあって、宮内庁書陵部所蔵の龍馬書簡10点を展示することは、新館のできた当館にとってステージアップの象徴ともいえる展示である。

この展示を行うことによって、当館の建設をはじめ多様な事業活動に尽力してくださった皆様に対する感謝の気持ちを伝えるとともに、高知県では初めて展示される薩長同盟の裏書をご覧いただき、歴史を動かした迫力と龍馬の息吹を直に感じていただきたい。

三浦 夏樹


薩長同盟裏書

『研究紀要』第3号　内容紹介

このたび第3号となる、当館が編集・発行する『高知県立坂本龍馬記念館研究紀要』を刊行しました。

毎年の発行が定着しつつあり、徐々に知名度も上がっていれば嬉しいのですが、いかがでしょうか。館の調査・研究の成果の発表の場というのが本誌の基本的性格であることに変わりはありませんが、3年目となった今号、初めて館外の方の論考を掲載するという新たな取り組みも行いました。今後も新たな試みを取り入れつつ、堅実な学術誌として発展・定着を目指してまいります。皆様にご批評いただくことが、本誌の成長につながります。ぜひご高覧ください。

以下に執筆者による要旨を掲げます。論文3本、資料紹介2本の充実した内容です。興味のある論考がありましたら、当館ミュージアムショップでご購入いただくか、お近くの図書館等で閲覧ください。

「女傑寺田屋お登勢」拾遺考

前田　由紀枝

令和元年度の企画展で、龍馬をめぐる女たち14人を取り上げた。実家の8人。恋仲2人。新しい家族の妻お龍とお龍の妹たち、寺田屋登勢という総勢14人であった。その中で、ひときわ異彩を放っていたのが寺田屋登勢（お登勢）であった。どうにも他の女たちと立ち位置が違う。

そこで、お登勢を知る身近な人の証言や記録、お登勢や龍馬らの手紙を列挙して拾遺録をつくり、寺田屋お登勢という人物を探ってみた。幕末を生きた一人の女が今なお語られる所以が証言等を通して垣間見えたのではないかと思う。

幕末期土佐藩政における色紙の位相

高山　嘉明

令和2年度の企画展「手紙の世界―龍馬で古文書ことはじめ―」の関連企画として開催した講演会の内容を文章化した。

土佐の「七色紙」のうち、幕末期に公用紙として流通した黄紙・桃色紙の存在に着目し、それを政治史のなかに位置づけた。まず、幕末期に色紙が公用紙に指定されるに至った背景と、指定された期間等について、制度的観点から検討した。次に、これまで桃色紙に比べて知名度の低かった黄紙を本格的に取り上げ、その色味や用途、特産品としての全国的評価等について明らかにした。そして、黄紙および桃色紙が、政治的にどのように位置づけられたのか、幕府への献上、老中奉書の包紙としての機能を中心に考察した。

楠瀬大枝の桜画（一）
――松桜主題を中心に

中谷　有里

土佐の化政期を代表する南画家で、桜画の名手とされた楠瀬大枝（1776～1835）の創作活動について、大枝がよく絵に描き、歌に詠んだ「松桜」主題に注目し、その表現的背景を実作例と『燧袋』の記録に基づき検証した。

まず「松桜」を詠んだ和歌の作例から、松と桜を組み合わせるきっかけとして、大枝がたびたび花見に訪れた孕山の情景があったことを指摘した。続いて絵画制作においては、松桜図が描かれた場の多くが祝賀の場であったことに着目し、現存作ならびに記録上の絵画作品と、それに添えられた和歌画賛を通して、本主題が松の不変性と、桜の若々しさを重層的に織り込んだ、主に節目の年を祝う吉祥画題であった様相を明らかにした。

岡崎家文書翻刻
一　岡崎菊右衛門年譜書　閏十月
二　岡崎菊右衛門日記（天保九～十五年）

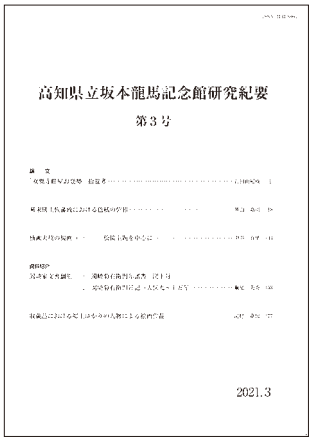
亀尾　美香

当館が寄贈を受けた岡崎家文書20点は、土佐藩の軽格・岡崎菊右衛門（起内）が記した幕末の日記を中心とする資料群である。菊右衛門は参勤の供や江戸勤番を幾度も勤めたため、日記には江戸における藩主周辺の日常の様子や幕末の土佐藩内の状況など、貴重な記述が含まれる。またこの日記は「山内家史料　歴代公記」に一部が引用されながら、刊本では「原欠」となっている箇所が複数あり、オリジナルを公開することに重要な意義があることから、今号および次号以下数回に分けて翻刻を掲載する。

収蔵品における郷土ゆかりの人物による絵画作品

河村　章代

当館には約1200点の資料を収蔵しており、大半は幕末期の古文書類であるが、約100点の絵画資料も所蔵している。そのうち、約半分の51点は郷土ゆかりの人物（主に、土佐藩または高知県出身あるいは在住し活躍した人物）による日本画である。河田小龍や古屋竹原、橋本小霞ら近世の絵師の他、中央画壇でも活躍した山岡米華や島内松南など、高知県の美術史上で重要な作家たちが揃っている。しかし、大半は展示の機会がなく、当館に所蔵されていることもあまり知られていないと思われる。本稿では、当館が作品を所蔵する「郷土ゆかりの人物」の略歴と所蔵の作品リストを紹介する。


高知県立坂本龍馬記念館研究紀要
第3号
2021.3

夏休み「とさっこ幕末ツアー」&りょうま工作教室

夏休みは、各地の博物館で教育普及担当者が色々工夫して普及事業を開催しています。当館も子ども向け事業の定番となりましたバスツアーと工作教室を8月に開催いたしました。

●とさっこ幕末ツアー

「龍馬・半平太・慎太郎・弥太郎の子ども時代は？～生家を訪ねて、どんな子ども時代だったか調べよう！」（8月1日）

今回のバスツアーでは、龍馬ら歴史に名前を残すような人物は、どのような子ども時代だったのか？をテーマに生家を訪ねました。夏休みの自由研究の参考にもしてもらえれば、と中学校教員でもある、県立歴史民俗資料館の西山浩生学芸課長にも同行いただきました。

ツアーはJR高知駅横**「『龍馬伝』幕末志士社中」**から始まりました。大河ドラマ「龍馬伝」で使った生家セットですが、これは同時期の民家を参考に作ったものです。実際の生家ではないですが、比較的裕福な龍馬の生活環境を感じられたのではないでしょうか。

バスは東に向かいます。三浦学芸員の〈町中幕末史跡案内〉を聞くうちに、**武市半平太生家（高知市仁井田）**に到着。こちらは現在個人の方が暮らしておられるので見学はできませんが、隣接の神社や記念館、お墓を見学しました。

次は、山間部の**中岡慎太郎生家（北川村）**。大庄屋だった中岡家、庭が御白洲のようになりお裁きの場になることもあったという豊田満広さん（中岡慎太郎館学芸員）のお話に一同「へ～」。

最後は**岩崎弥太郎生家（安芸市）**です。門田由紀さん（安芸市立歴史民俗資料館学芸員）から三菱のマークの基になったともいわれる岩崎家の家紋や弥太郎が石を組んで作った日本列島などの説明を聞きながら、生家を見学しました。

見学するところ盛沢山の1日でしたが、参加者のみなさんが、生家を訪ね、環境は異なっても、みなが志を持って活躍していた時代を少しでも体感できたならうれしいと思います。これからも、こうした〝時代を体感する〟普及事業を考えていきたいと思っています。

●りょうま工作教室

「飛び出す！龍馬記念館を作ろう！」&「立版古で近江屋をつくろう！」（8月7日）

龍馬記念館のポップアップカード作り（低学年向け）とペーパークラフトでの近江屋つくり（高学年向け）をしました。参加者が少なかったのは残念ですが、こちらの想像を超えるような作品を作った人もいて、子どもたちの自由な発想に驚きました。

河村 章代

ここは館長の部屋

吉村　大

わが須崎愛

今号では私のよもやまな、お話しをご披露させていただきます。

私は、昭和35年に須崎市で双子の次男坊として生まれました。現在は縁あって、高知市の五台山の麓に住んでおります。兄は高知市内で教員を務めています。

兄弟で、特に双子でもありますので、容姿や声も似通います。当館に着任早々、自己紹介や今後の抱負についてのラジオ取材を受け、FM高知で放送されました。

8月の過日、兄から「最近、ラジオに出演したか」と聞かれ、「出たよ。FMラジオに」と答えると、「どおりで身に覚えがないのに、生徒や保護者の皆さんから、『先生、ラジオに出てたよね』と声がかかったのか」と納得顔でした。

私の自宅前にあるバス停名は「南吸江」で、江戸期には吸江村であったのだろうと偲ばせます。我ら兄弟の地元・須崎の地名は、慶応3年8月に坂本龍馬が寺田屋お登勢や、長岡謙吉、兄・権平に宛てた手紙において「すさきの港」と記されています。龍馬の手紙に須崎の地名が書きとめられていますので、感慨深い気持ちになりました。

須崎の港のすぐ近くの須崎市中町には西浜公園という、里山ならぬ里公園があって、地元の人は皆、「台場」と呼びます。須崎市にも「お台場」があったという噺の落ちではなくて、その公園にはかつて土佐藩の砲台が築造されていましたので、「台場」という呼び名で親しまれてきました。地名や呼び名には「歴史の息吹き」を感じさせます。

ちなみに私の父方の祖父母は、須崎市中町で鶏肉卸売業の「かしわの吉村」を営んでおりました。すぐ近くには谷口食堂があって、昭和40～50年代かとの記憶ですが、そうです！鍋焼きラーメンを世に送り出した伝説の名店です。鍋焼きラーメンは、鶏ガラだしの醤油味スープに、細麺、そして親鳥、ちくわ、ネギ、生卵、最後に鳥の油をトッピングします。鶏ガラ、親鳥、鳥の油は「かしわの吉村」が供給してましたので、祖父母はいわば鍋焼きラーメンの開発メンバーの一員です。祖父母に頼まれて、兄弟で谷口食堂などに配達に行ったことが懐かしく思い起こされます。

ぜひ皆様には、これらのことに意に留めてもいただきながら、須崎の港やグルメを巡ってみてくださればと思います。

龍馬の手紙 12

小弟ハエゾに渡らんとせし頃より、新国を開き候ハ積年の思ひ、一世の思ひ出ニ候間…

（慶応三年三月六日、印藤聿宛）

江戸時代の北海道は「蝦夷地」と呼ばれ、対ロシア政策の最前線にあった。天明3年（1783）、工藤平助が「赤蝦夷風説考」を著し、蝦夷地やロシア南下の状況を伝え、老中田沼意次は最上徳内ら調査隊を蝦夷地に派遣した。その後、寛政3年（1791）、林子平は『海国兵談』を出版し、ロシアによる日本侵略の危機と海防の充実を訴えたが、老中松平定信は人々の不安を煽る書として絶版にし、子平に蟄居を命じた。その後、度重なるロシアの来航で、緊張関係は高まっていったが、多くの志士たちの知るところではなかった。

嘉永3年（1850）、松浦武四郎は蝦夷地調査の記録「初航蝦夷日誌」を著し、日本で最も重要な場所が蝦夷地であり、蝦夷地を知らずして志士とは言えない、と蝦夷地に目を向けるよう強く訴えた。武四郎の調査は6回、調査記録は151冊にまとめられたほか、詳細な地図や紀行本を出版し、蝦夷通として世に知られていった。「雄魂姓名録」（京都国立博物館蔵）には「伊勢 松浦竹四郎　先生は林士平ぬしの志を次ぎ、蝦夷地廻覧ス」とあり、北添佶摩は武四郎に面会し、蝦夷地の地図や紀行本の提供を求めた。また、龍馬が探し求めた『新葉和歌集』は、志士の士気を高めるため武四郎が嘉永3年に再刻しているほか、武四郎は当時の竹島（現在の韓国領鬱陵島）の地誌「他計甚麼雑誌」を嘉永7年（1854）に著し、竹島を守る必要性を訴えている。

残念ながら龍馬と武四郎には直接の交流を示すものはない。しかし、龍馬の手紙を読んでいると、武四郎とつながる気がしてならない。

山本 命（松浦武四郎記念館 主任学芸員）

私のおすすめ No.12

今年4月からキャッシュレスにも対応「受付」

今回は来館される方がまず最初に必ず立ち寄る場所、受付をご紹介します。坂本龍馬記念館は、平成3年に開館し、平成29年4月から約1年間休館した後、平成30年4月21日にリニューアルオープンしました。それまで受付は、今で言う本館の1階（現在ミュージアムショップがある場所）にありましたが、リニューアルを機に、新館1階に場所が変更になりました。新しい受付は県産材を使用した木のカウンターで、無機質なコンクリート造りの中でより一層温かみを感じ、親しみやすく立ち寄りやすい受付カウンターになっています。今は新型コロナウィルス感染防止対策でアクリル板を設置していますが、声が聞き取りづらかったり、マスク着用で表情が読み取りづらかったりと対応の難しさを感じることもありますが、工夫をしながら日々業務にあたっています。今年の4月からはご要望の多かったクレジットカードや電子マネーなどのキャッシュレス決済もご利用いただけるようになりました。ミュージアムショップの方でも同様に利用でき大変便利になっていますのでご来館の際は是非ご利用ください。

リニューアル後、多い日には1日3，000人以上の来館者が訪れ、連日多数の団体予約を頂いておりましたが、今は1日の来館者数が一桁の日もあるなど、来館者が激減している現状を見ると、今がいかに非常事態であるかを痛感します。今年8月から9月にかけても3度目の臨時休館を余儀なくされ、感染拡大に歯止めがかからない状況が続いていますが、1日でも早くマスクとアクリル板を外してお客様をお迎えできる世の中になってほしいと願うばかりです。

小島 千穂

アクリル板に囲われた受付カウンター

学芸員の視点

今井貞吉が見た薩摩の近代化

亀尾 美香

展示の準備中は、常に申請書類の提出や図録執筆・校正などのタイムリミットに追われ、見落としをしがちである。後で気づいて愕然とするが、今後の課題として再び取り組む機会を与えられた、と無理やり前向きに考えることにする。今回は昨年の特別展「薩摩と土佐」での失敗を、追加調査で補い紹介することで後始末としたい。

幕末の土佐に生きた、今井貞吉（1831～1902）という人物がいる。下横目を務める藩の下級武士であったというが、人名辞典には「博物家」「古銭研究・収集家」「実業家」とあり、学識も深い人だったようだ。この人が安政6（1859）年、藩命で薩摩へ視察に赴いている。

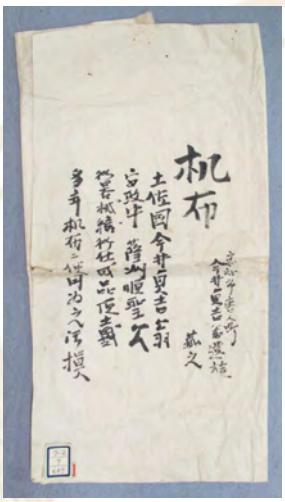
筆者の失敗というのは、安政元年に薩摩へ行った河田小龍を把握しながら、今井貞吉を見落としたことである。講演会講師として、資料を借用した尚古集成館の松尾千歳館長をお招きしたのだが、事前に送られてきたパワーポイントの中に、同館が所蔵する「今井貞吉旧蔵の国産帆布」（写真①）があるのを見て驚いた。手元には、この件を記した寺石正路の『南国遺事』があったにもかかわらず、該当部分を読んでいない。慌てて今井の伝記を探し出し（間宮尚子『今井貞吉』、平成2年、高知市民図書館）、ここからさらに、今井が薩摩で筆写したガラス製造に関する書「波瑠（はり）精工全書」（写真②）や、薩摩行きの詳細を記した「歴嶋史」（写真③）が、高知市立市民図書館にあることも知った。こんな素晴らしい資料が3点もあれば、展示の中で十分紹介することができたのに、何たる不覚。悔やみながらも、この3点の資料は後追いで調査をさせていただいた。

今井の旅立ちは安政6年2月。当時の今井は舎密（せいみ）学（現在でいう化学）に没頭し、土佐の尾戸焼からガラスを製造する研究に打ち込んでいた。ガラス製造についての建言が容れられ、今井は藩命によって長崎・薩摩へ派遣されることとなった。3月に長崎に至りしばらく滞在、4月に薩摩へ入る。ちょうど前年に藩主斉彬が急死し、集成館周辺は混乱していたというが、今井は田上邑の「水車館」（水力による紡績工場）を訪ね、宇宿彦右衛門から前掲の「波瑠精工全書」を借覧・筆写、のちに薩摩の開成所教官となる石川確太郎らにも会っている。約1ヶ月滞在したのち、今井は薩摩を離れ、6月に土佐へ帰った。

件の帆布（写真①）は、この時今井が薩摩でもらい、大正7（1918）年頃に今井の遺族から島津家に寄贈されたものとのこと（前掲間宮『今井貞吉』）。昨年12月、特別展で借用した資料をお返しする際、尚古集成館で実見・撮影させていただいた。今井が「机布」として用いていたという布は厚みのある、帆布らしいしっかりとした織で、ところどころ褪せた青色や、今井がつけたものか墨の汚れが残っている。技術的な事柄は素人ながら、通常、当時の外国製織機で作られた布は8本糸で織られているところ、今井の帆布は6本糸で織られており、規格からいえば欠陥品だが、逆にそれが日本独自の技術で織られたことの裏付けになっているという（玉川寛治「補論　集成館で製作された日本最初の力織機「大幅織」とそれで織った帆布」、『薩摩ものづくり研究　近代日本黎明期における薩摩藩集成館事業の諸技術とその位置付けに関する総合的研究』所収、平成18年）。今井が机に敷いていた帆布は、実は国産初の機械織綿布という貴重なもので、さらにその布を遺族が大切に保管し、鹿児島に寄贈してくれたおかげで、幕末の薩摩が高い先進性と技術力を有していたことの証明となっている。そうした重要な資料をガラス越しでなくじかに見、（手袋越しながら）触れることができるのは、学芸員冥利に尽きる本当にうれしい瞬間で、帆布を前にしてしばし感動にひたるほどだった。

先の松尾館長によると、幕末の薩摩藩は、日本そのものを近代化するための産業開発を薩摩単独で負うのは難しいと考え、他藩の人間であっても視察希望を積極的に受け入れたという。集成館の当時の図面が佐賀にあり、「波瑠精工全書」のような書が高知にあるのもそのためである。それでいて、薩摩はやはり日本の近代化を引っ張る、押しも押されぬトップランナーであった。薩摩がこうありえたのはなぜか。武士の数が多く人材が豊富であること、密貿易で得た豊かな経済力、日本列島の南端に開けた立地、藩主斉彬のように開明的で優れたリーダー。あらゆる駒がタイミングよく揃うことで、薩摩は政治においても産業分野においても、日本が新しい時代を迎えるために不可欠な要素のひとつとなりえたのだろう。

「薩摩と土佐」展では、戊辰の「勝ち組」、あるいは会津など旧幕府側から「加害者」とされることも多い薩摩が、それな



写真①帆布〈縦55.5×横92.5㎝〉および
由来が記された包紙（尚古集成館蔵）

りに多くの血を流し犠牲を払っていることも再認識した。薩摩人も人であれば、幕府相手に好んで戦争をして、自藩の人命や武器（整備に莫大な費用がかかっている）を失いたくはない。戊辰戦争で新政府側最多の死者を出したのは、最大の兵力を投じていた薩摩であり、西南戦争では同士討ちのような結末を迎えた。西郷も大久保も畳の上で死ねなかった。「維新」は薩摩にとっても、決して明るく希望に満ちただけの時代ではなかったのである。

写真②今井が筆写したガラス製造の書物「波璃精工全書」より「ビールグラス」の画（花井一好著、高知市立市民図書館蔵）。ガラス作りの道具など、他にも多くの挿画がある。

写真③今井が長崎・薩摩行きの詳細を記した「歴嶋史」（高知市立市民図書館蔵）。
薩摩で得た知識として、化学的な手法で豚の血液から「青靛（せいてん）」（青色顔料の「紺青（こんじょう）」）を多く抽出する方法を絵入りで記している。

［付記］帆布についてご教示くださり、調査をさせてくださいました尚古集成館および同館の松尾千歳館長に、記してお礼申し上げます。「歴嶋史」の化学的な記述については、渋谷雅之氏よりご教示を賜りました。併せてお礼申し上げます。

テーマを追い続けるということ

前田 由紀枝

たいそうなタイトルだが、図らずも長期に亘っておつきあいしている、と言った方が相応しい。テーマのひとつは前号でも書いた坂本直行さんという開拓農民として人生の大半を生きた絵かきのこと。

遡れば高校時代に高知の菓子店『浜幸（はまこう）』に並んだ北海道のチョコレート（六花亭製）にある花々が好きで、味のおいしさは無論のことその包装紙を集めることを楽しんだものだ。花の絵を描いた人は知らなかったが、まさに直行の絵であった。

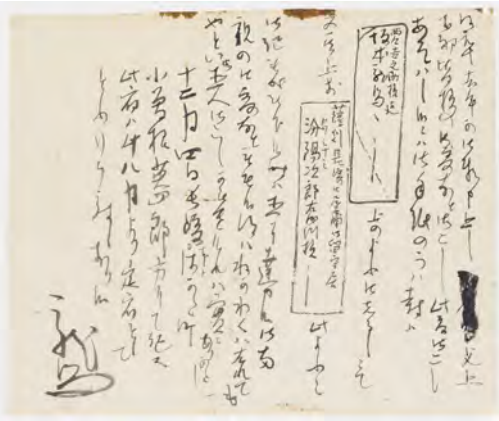
そのころ同級生の土産で初めて食べた六花亭のマルセイバターサンドは、北海道というより異国の香りがした。マルセイという馴染まない名前が、北海道十勝・帯広の開拓会社「晩成社」牧場の屋号「成の字を○で囲んだもの」だと知ったのは16年前。「反骨の農民画家　坂本直行」展を開催するため帯広百年記念館を訪れ、六花亭の担当者から説明を聞いてのことである。

かつて件の友人が芸西村の浜辺で、秋雨に沈む鉛色の海を見て「オホーツクみたい」と言うので、オホーツク沿岸の流氷を見る旅をしたこともあった。そこはまさに直行さんの祖父直寛が高知から移民を連れて行った場所であった。

遠い記憶の風景が今ここに続いている。

直行さんとの出会いは、道内各地に眠っていた坂本龍馬資料との出会いにもつながった。例えば、直寛率いる坂本家の移住先、北海道樺戸郡浦臼町（道東・羅臼と間違える人が多いが、石狩川流域の札幌圏）にある若々しい龍馬の手紙。持ち主は高知県本山町出身の係累である。坂本当家に伝わる資料も幾度となく高知で紹介させていただいたし、行方の分からなかった龍馬の愛した佩刀や坂本家が火災に遭ったときに焼失したと思われていた龍馬書簡（慶応2年12月4日　家族一同宛）の一部などは記念館に寄贈された。

龍馬や直行さんといっても、会ったこともない人たちだ。それでも時間と空間を超えて共に旅するときがある。歴史というものさしが、目の前の風景をはるか過去にまで俯瞰させてくれるからであろう。



大正2年釧路の大火で焼失したと思われていた龍馬の手紙の一部。150年を経て出現した。

海の見える・ぎゃらりい

■ 特別展「龍馬と北の大地」展関連展示
「第1部 蝦夷地へのまなざし―龍馬と幕末の志士“松浦武四郎 追体験”」展

海の見える・ぎゃらりいでは、10月5日（火）から、特別展「龍馬と北の大地」展の関連展示として、新館の企画展示と合わせた体験型展示をご覧いただきます。第1部「蝦夷地へのまなざし―龍馬と幕末の志士」の会期中は、松浦武四郎に関する「北海道国郡検討図」レプリカと「一畳敷」原寸大模型などを展示します。見どころなど詳細につきまして、特別展の担当学芸員からご紹介いたします。

展示する「一畳敷」の模型（写真は松浦武四郎記念館での展示風景）

今回、海の見える・ぎゃらりいでは、“北海道の名付け親”と評される松浦武四郎の人となりについて、企画展示室では紹介しきれなかった、体験型の展示をおこないます。一つ目は、晩年の武四郎が東京の自宅に増築した「一畳敷」と呼ばれる建築物の、原寸大模型です。武四郎は、全国各地を旅した人物として知られますが、自身の旅人生の集大成として、各地の知人から神社仏閣の古材の提供を受け、それを組み合わせて小さな建物にしたものです。畳一畳しかない不思議な空間に、実際に入っていただけます。武四郎の世界観を感じてみてください。この模型は、武四郎の生まれ故郷三重県松阪市にある松浦武四郎記念館から提供を受けるものです。二つ目は、武四郎が出版した地図です。武四郎は出版人としても知られますが、主要なものの一つに地図がありました。それは26枚もの紙に分割され、そのすべてを並べることで、蝦夷地全体をカバーする大判の地図が完成するというものです。そのレプリカを、北海道の十勝毎日新聞社から提供していただきます。展示するのは実物を拡大した大きなものです。ぜひ、その大きさと北海道を実感してください。

武四郎の生まれ故郷である三重県松阪市には、今回の特別展で「特別後援」をいただきます。その松阪市の歴史や食などの豊かな観光についての情報も、パネル等で紹介します。「北の大地」展なのに何故三重県なのか…そう思った方にこそ、松浦武四郎という人物について知っていただきたく思います。ご来館の上、ぜひご自身の目で確かめてください。特別展の会場はもちろん、いつもとは少し雰囲気の違う海の見える・ぎゃらりいへのご来場もお待ち申し上げます。

※体験型展示については、新型コロナウイルス対策の観点から展示物や展示方法を変更することがあります。

中村昌代・髙山嘉明

「北海道国郡検討図」レプリカ
（写真は過去の展示風景）

入 館 状 況

2021年9月20日現在
（1991年11月15日開館以来 29年309日）

◆入館者数 4,379,764人
■リニューアルオープン（2018年4月21日）以来 443,004人

編集後記

人類の歴史は伝染病との戦いの歴史。よく聞くフレーズですが、日々のニュースを目にするたび、2021年に生きる自分がその歴史のただなかにいることを思い知らされます。天然痘、ペスト、コレラ、麻疹、インフルエンザ、そして新型コロナ…これだけ医学が進歩しても、新たな伝染病を前にした人間は、弱く儚い命でしかありません。しかし、私たちの祖先は何度も流行を繰り返すさまざまな伝染病と折り合いをつけ、共存してきました。大きな犠牲を払い、また時間をかけて、今回も同じゴールに到達することになるでしょう。嵐が過ぎ、再び陽の光の射す日が戻るまでの「我慢」。今私たちにできるのは、それしかないように思います。（か）

館だより“飛 騰”第119号（年4回発行）表紙題字：書家 沢田 明子氏
発行日 2021（令和3）年10月1日
発 行 公益財団法人高知県文化財団
高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL（088）841-0001 FAX（088）841-0015
http://www.ryoma-kinenkan.jp
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください
開館時間 9:00～17:00 年中無休
入 館 料 一般500円（企画展開催時700円）
高校生以下無料
高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（1名）は無料

「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数（4回分まで）お送りください。
〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読 係 まで

私のテーマ

蝦夷地をめぐる 松浦武四郎と龍馬の関わり

ノンフィクション作家
札幌市在住
合田　一道

拙著『龍馬、蝦夷地を開きたく』を出版したのは2004年だから、もう17年も前になる。北海道龍馬会の設立に関わったのを機にまとめたのだが、道内でもその事実を知る人は少なく、龍馬ブームにも後押しされて大きな反響を呼んだ。

龍馬が蝦夷地を目指しながら断念した話を耳にしたのは、新聞記者をしていて坂本家本家の坂本直行さんと出会った時だから、半世紀以上も前になる。だが直行さんの〝いごっそう〟ぶりにためらいを感じて、書くのを辞めた。その意味では遅れたとはいえ、いい時期の出版だったと思い返している。

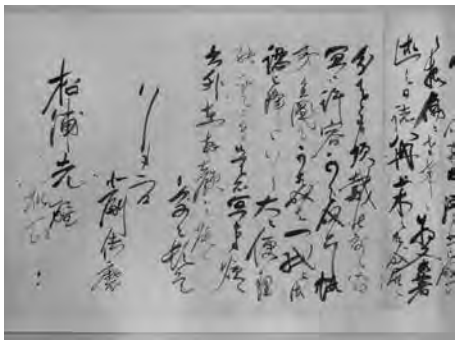
出版してから

本を出して後、著者の存在を知って、龍馬に関わる新しい情報を持ち込む人が目立った。龍馬の意志を継いだ甥に当たる坂本本家の直寛が、北海道・北見に入植した後、キリスト教の牧師となり、受刑者や戦地へ赴く若者に励ましの説教をした話や、龍馬家を継いだ坂本直（高松太郎）の妻トメが夫亡き後に、直寛を頼って北海道・浦臼に移住した後の話などなど。ある時は、トメの係累と名乗る男性が現れ、トメの便りのコピーを見せられた。トメは京都で催された龍馬の回忌法要に出席するため京都に赴き、在京中、龍馬が暗殺された近江屋に宿泊した。それに対する礼状なのだが、その中身について尋ねられて、大いに面食らった。

北添からの便り

身震いするほど驚いたのは、三重県松阪市の松浦武四郎記念館から、北添佶磨の武四郎宛て便りが2通ある、という情報だった。龍馬の同志である北添は、龍馬が蝦夷地を目指す前年の文久3年（1863）5月2日、能勢（瀬）達太郎、小松小太郎らとともに、密かに越前敦賀から船で蝦夷地へ向かった。龍馬の指示によるものと思われる。

蝦夷地を見て歩き、7月8日に江戸に戻った北添が、武四郎に便りを出したのは7月24日だが、その内容から帰国してすぐ武四郎に会い、蝦夷地に関わる8冊の書物と蝦夷地全図がほしい、と頼んでいる。もう1通は8月26日付けで、書籍などを受け取った礼をしたためている。



北添佶磨の松浦武四郎宛の便り
＝松浦武四郎記念館蔵（三重県松阪市）

この2通の便りから北添は、龍馬の蝦夷地行きを翌年に控えて、事前に現地に赴いたが、そこで蝦夷地に精通し、書物も出している松浦武四郎の存在を知ったようだ。戻ってすぐに江戸の武四郎を訪れ、「蝦夷初航日記」などの書物と蝦夷地地図を入手したもの、と判断できる。

北添から視察報告を受け、武四郎の書物を見せられた龍馬は、蝦夷地開拓への確信を深めたのは容易に想像できる。

松浦武四郎

蝦夷地開拓へ

翌元治元年（1864）6月2日、龍馬は同志50人を黒龍丸に乗せて神戸を出帆し、江戸に着いたのが6月17日。これは幕府神戸海軍伝習所長をしていた勝海舟の日記に見える。ところが航海中の6月5日夜、京都・池田屋で勤皇の志士らが新選組に襲われ、13人が闘死する事件が起こった。その中に北添ともう一人、同志で神戸海軍伝習所生の望月亀弥太が含まれていた。

これを伝え聞いた龍馬は、海舟に迷惑がかかると判断し、蝦夷地行きを江戸まで来た段階で中止した。龍馬にすれば蝦夷地の的確な情報も握っており、行こうと思えばいつでも行けるという思いだったのであろう。

夢の消滅

龍馬の読み通り、海舟は海軍伝習所長を免職になり、伝習所は閉鎖される。しかも龍馬が望む肝心の蝦夷地行きは、いろは丸の衝突沈没などでうまくいかない。致命的だったのは準備した大極丸に、イギリス水兵2人を殺害した犯人が逃げ込んだ疑いで、自由に動けなくなったことだ。将軍徳川慶喜により大政奉還が決まり、龍馬を感激させるが、その直後、京都・近江屋に滞在中、何者かに暗殺され、蝦夷地行きの夢は消滅する。

龍馬の夢を潰したものが、京都で起こった新選組による池田屋騒動なのは明らかだが、その後に蝦夷地箱館へ赴いて戦死した土方歳三や、分裂後に逃れて蝦夷地松前藩に至り、医師の婿養子になった永倉新八などを思うと、見えない糸に操られたような人生の不思議さを感ぜずにはいられない。

坂本龍馬

赤れんがと東京五輪マラソン

高知大学短期研究員
前田　桂子

２度目の東京五輪は、新型コロナウイルス禍の緊急事態宣言下での開催であったが、勇敢なアスリートたちのパフォーマンスに感動の嵐を受けた毎日であった。そして、閉会式で高知県宿毛市出身のソプラニスタ岡本知高さんが、故郷の清流仁淀ブルーをイメージした鮮やかな衣装をまとい、五輪賛歌をダイナミックに熱唱、２０２０東京五輪を格調高く締め括り、高知県人として誇らしく感じた。さらに、私は札幌で開催されたマラソン競技に釘付けになった。それは10年前から『北海道開拓に貢献した高知県人』の調査で訪問した旧北海道庁本庁舎（赤れんが庁舎）および北海道大学構内の赤い屋根が目を引くモデルバーン＆クラーク博士の胸像が、周回コースの為に何度も放映されたからである。

今回のオリンピック会場に選ばれた札幌は今や日本五大都市、その人口は２００万人ともいわれている。最初にその創成期の札幌についてふれたい。

「御用火事」首都札幌の建設

新政府は北海道の開拓を総判する「開拓使」を設置。１８７０（明治３）年、本庁が函館より札幌開拓使庁に移庁、鹿や熊が出没する人煙稀な原野に遠大な市街計画の立案であった。それを引き継いだ岩村通俊判官（高知県宿毛市出身）は、首都札幌の建設に当たった。１５０年前、当時の街並みはカヤ造りの草小屋、開拓成否のカギは火災予防であり、「草ぶき屋根を禁止、家作料１００円を貸与、柾葺き屋根の本建築」を奨励したが、貸付金を酒食に使う者が多く、改築は一向に進まない。これに業を煮やした判官岩村通俊は、翌年４月、自ら馬に乗り、通知したうえで延焼防止のため消防組もひかえさせ、まず官庁建物の草ぶき倉庫を焼き払い、町家の草小屋も焼き払った。大胆な放火による都市改造を世間では「御用火事」と伝えている。１８７２（明治５）年、岩村は大判官に昇進。

開拓使官員（中央・岩村通俊大判官）北海道蔵

やがて１８７３（明治６）年に札幌本道が完成し碁盤目の基礎がおかれ、官地の中央に開拓使札幌本庁舎も完成、北海道開拓の足場ができた。ところが１８７９（明治12）年に札幌本庁舎が全焼。その後、開拓使は廃止され、１８８６（明治19）年、北海道庁の設立で初代北海道庁長官に岩村通俊が就任、旧北海道庁本庁舎（赤れんが庁舎）の建設に着手、１８８８（明治21）年に完成。その後に内部火災もあったが復旧され現在に至る。「赤れんが」とも呼ばれ、札幌のシンボルとして親しまれている。高知県人として名誉に感じる。

次に、札幌・赤れんがに係る私の思い出の中から3例を挙げたい。

クラーク博士とモデルバーン

北海道大学の前身である札幌農学校は、東京大学より1年早い１８７６（明治９）年に開校、開拓長官黒田清隆の主導で開拓使官吏養成を目的に、専門教師としてウィリアム・スミス・クラークを一ヵ年の契約で招聘した。外国人教師による英語教育を徹底、日本最初の「農学士」の称号が授与され、手厚い官費生の近代的大学として位置づけられたが、卒業後5年間は開拓使に従事し、北海道への編籍が義務づけられた。初代教頭クラークは同校の基礎固めに意欲を燃やし、厳しい進級試験に第1期生24人の中で卒業生は13人となり放校生徒が続出した。卒業生の中に土佐藩士子弟の内田瀞（きよし）・黒岩四方之進（よものしん）・田内捨六のエリートがいた。彼らは士族中心の知識人社会に育った3人であったが、マサチューセッツ農科大学に由来した教育理念とキリスト教的教育を受入れ、クラーク教頭の賞讃を得る成績を示し「土佐ボーイ達」と愛され、開拓使御用掛として北海道開拓事業にその英知を注いだ。

なお、クラーク博士は「日本国ニ要スル農業ノ修整」の論文を『札幌農黌第一年報』に発表。その内容は、北海道の風土に適した有畜農業経営の確立を提言。クラーク博士の構想に基づき、日本最初の洋風畜舎モデルバーン（模範家

畜房）を建設。その後これに倣って根室などの各勧業課試験場に洋風畜舎が建設され、北海道近代酪農発展に大きな役割を果たした。北海道大学農学部第2農場内に9棟の実習施設が現存しているが、現在はモデルバーンと穀物庫が内部公開されている。

加えて、1926（大正15）年、北海道大学は創基50周年およびクラーク胸像除幕式（中央講堂前）を挙行、高松宮が差遣され、3400人が参加。その年はクラーク生誕100周年にあたり、直弟子である1期生の内田瀞・黒岩四方之進たちが参加された。ところが、太平洋戦争中の金属類回収令により供出、現存は二代目像である。

北海道議會議事堂 議長前田駒次の肖像画

私は2011（平成23）年7月、70歳の時に高知短期大学卒論の課題調査で、北見市・浦臼町を中心に先人たちの子孫を訪ねた。その折、北光社移民団の責任者であった前田駒次（本山町出身）の北海道議会第12代議長の肖像画の調査で北海道議會議事堂を訪ねた。当時の議事堂は北海道庁旧本庁舎（赤れんが庁舎）左横に建っていた。

なお前田駒次は1893（明治26）年、武市安哉率いる聖園農場先発隊の一員として浦臼に入植したが、1897（明治30）年に請われて北光社に移った。北光社社長坂本直寛は4ヵ月足らずで現地を去り、副社長澤本楠弥も7年間の滞在で帰郷、農業指導員であった前田駒次は現地支配人となり北光社農場の運営に携わった。貧窮にさいなまれながらも鉄道敷設、銀行・公共施設誘致など北見繁栄の基礎を固められ、実に四半世紀に及び道政に参画。「北見の父」と敬慕され1945（昭和20）年、87歳、北見市初めての市葬がとり行われている。

さて、北海道議会事務局担当者は、玄関まで出迎えてくださり「子孫の方が議長肖像画を見に来られることはあるが、大学の研究では初めて」と、壁一面に天井まで隙間なく並べてある歴代議長の肖像画の中から、上段に飾られていた立派な額におさまった前田駒次の肖像画を、高い脚立を使用して下ろしてくださった。濃密な油絵の肖像画を手元で拝見でき懇切さに感無量、思い出深い資料の一つとなった。さらに議場へも案内いただいた、議場内は全国唯一の馬蹄形であり、正面は大理石で装飾、天井に雪の結晶をイメージした道章を中心に会場を覆う円形の照明が施され、気品さに一驚したことであった。玄関まで見送って下さった担当者の「贅を尽くした議事堂以上のご厚意」を今も忘れることはできない。

その議事堂は撤去され、2020（令和2）年、北海道庁本庁舎に隣接した位置、すなわち、赤れんがと同敷地内の後方に新築移転。歴代議長肖像画は一般開放エリアに掲げてあり予約なしで閲覧可能と聞かされた。

北海道立文書館 根釧原野に高知小中学校

2015（平成27）年6月、74歳の時、高知大学修士論文の課題調査で、オホーツク地域（興部・滝上・紋別・湧別・北見・訓子府）、根室地域（中標津・別海・根室）、釧路地域（弟子屈・標茶・厚岸・浜中・釧路）を中心に高知県からの移住者の子孫を訪ねた。許可移民制度は、昭和初期に限界地帯と言われていた根釧原野への移住であった。そこに厚岸町立高知小中学校（土佐団体が別寒辺牛特別教授場を開設、高知尋常小学校に昇格）が開校されていた。しかし生徒激減のため2019（平成31）年4月から休校となってしまった。

加えて公蔵資料を探して2015年11月、赤れんが庁舎内に開館されている北海道立文書館を訪ねた。同館所蔵の『北海道国有未開地処分完結文書・許可移民台帳』53冊を全頁くまなく確認しながら高知県関係者を探し出す作業であった。資料は地下2号書庫から学芸員がブックトラックで5冊ごと運搬。時代は昭和初期であり、薄い習字紙の粗悪品のような素材でめくりにくく、分厚さにも狼狽。閲覧室への私物持込不可、カメラのみ可と制約もあり、予想以上に手間がかかり困惑。そこで、開館前に玄関で待ち、昼食は取らず閉館まで粘り、椅子に座らず見落としなくスピードを上げ資料撮影、同館学芸員の方々の好意的対応に助けられて、一週間で700枚ほど撮影できた。その後に落度のあることが判明、翌年2月に再び同館を訪問する羽目となった、苦くも意気込み充実感を噛みしめた思い出がある。

冬の赤れんが庁舎
（高知大学大学院「修論」発表時のタイトル画面）

初代北海道庁長官岩村通俊の偉功「赤れんが」の館内で、修士論文の調査に没頭できた幸せを大切にして行きたい。ところが文書館も2020（令和2）年4月、江別市にある道立図書館の横に新装移転されたと聞く。

ともあれ、札幌で開催された東京2020オリンピックのマラソンコースは私にとってビッグプレゼントとなった。

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（四十七）―

藤原彰子と島津篤子

宮川　禎一

筆者の得意は平安時代の藤原道長だ。寛弘四年（一〇〇七）に大和国の金峯山に登って埋めた金銅藤原道長経筒（国宝）の担当者が筆者だからだ。登山の翌年に一条天皇の中宮であった長女の藤原彰子に皇子（敦成親王）が誕生し、のちに後一条天皇になったことにより道長政権は盤石となったというのが平安時代史だ。強力な藤原氏本流左大臣家（摂関家・のちの近衛家）が天皇・皇室を後見する構造である。

よく似た話が幕末にもある。後世の我々は「歴史の結果」をよく知っているので、すべての事象が明治維新に向かって進んでいたと解釈しがちだ。しかし安政年間に生きていた人々は未来に維新が来ることを知らない。

薩摩藩主の島津斉彬は名君とされ、開明的で視野も広く、人望が厚かった。この斉彬が安政三年（一八五六）十一月に養女篤子（篤姫）を近衛家経由で十三代将軍徳川家定のもとに正室として輿入れさせたのは「家定の後継者に英明な一橋慶喜を指名させるため」というのが「歴史」なのだが、大樹公が病弱だなどとどれほどの人が知っていたのか。普通に考えれば徳川将軍家に娘を正室として嫁がせて、男子が産まれればお世継ぎであり、次期将軍だ。島津斉彬が幼い将軍の外祖父として幕府内で強大な政治力を発揮できるという「未来図」を老中阿部正弘や薩摩藩は描いていたのではないか。島津斉彬＝藤原道長だ。

道長は長命し、中宮彰子は二人の皇子を生んだので十一世紀史は藤原摂関政治の最盛期なのだが、もしも彰子に皇子が生まれていなければ定子の産んだ第一皇子（敦康親王）が次代の帝であったはずだし、定子の兄弟である藤原伊周・隆家（中関白家）が政権を担当したはずだ。

安政年間に戻れば、安政四年六月に阿部正弘が死に、安政五年七月六日に将軍家定が死に（篤姫に男子は生まれず）、島津斉彬も十日後の七月十六日に急死して、その未来図は瓦解した。しかしすべてがうまく進んでいれば強力な薩摩藩が徳川将軍家（島津家の血をひく幼将軍）を後見する構造が成立したかも知れない。戊辰戦争を経た「明治維新」とは全く異なる「幕藩体制のままの近代化」が起こったのかも、などと思う。

藤原道長が建立した法成寺の跡地
（京都市上京区荒神町）

“話してみるかよ”

― 龍馬像のつぶやき ―

岡﨑　洋一郎

2019年5月1日元号が令和となった日本・・・けんど日本をふくむ世界が今はコロナ禍に翻弄されて大変なことじゃ。振り返ると幕末の日本も混乱と騒動の時代じゃった。わしは1835（天保6）年11月15日に生まれ、1867（慶応3）年11月15日33歳のとき凶刃で落命。明治、大正と約60年経た1928（昭和3）年に土佐の青年や学生等のエネルギーで、わしにはもったいない立派な龍馬銅像を桂浜の丘に建ててくれたがよ。

日本海軍の軍艦が土佐湾にきて盛大に祝うてくれてたまげたぜよ!

歳月は流れ35年後の1964（昭和39）年から日経新聞夕刊に司馬遼太郎さんの小説『竜馬がゆく』の長期連載が評判となり、やがて文芸春秋社から出版され、続いて文庫本も出た。その後の人生ドラマがこれほど人気沸騰するがにびっくりしたぜよ！勢いがつくのは怖いのう。NHKの大河ドラマ＜龍馬伝＞が2010（平成22）年放映されたが、これが又こじゃんと盛り上がってのう。わしのこればあ長期の人気には、ちっくとおだてが過ぎてつべがこそばい気がしたぜよ。

1991（昭和60年）わしの生誕150年の節目を記念して、全国各地からの募金や高知県人会等の協力で、浦戸城跡に1991（平成3）年「高知県立坂本龍馬記念館」が完成したがよ。今年4代目の吉村館長までは、小椋（初）森（2代）髙松（3代）館長の運営企画と努力は素晴らしく、目を見張ったもんじゃ。わしの手紙や遺品等資料の蒐集、館の増築充実に頑張ってくれた。感謝感激をしちゅう。

湾をつなぐ浦戸大橋も架かり種崎の東には外洋新港も出来た。龍馬ファンの会も賑わいよった。さて桂浜にわしの銅像が建って100年がせまってきたが、湾や周辺の変化発展の裏側では浦戸の家並みも寂れが目立つ。又浜の5色石も、土佐犬の喰い合わせも今は消えた。地球環境の変化も気になる。これも新しい時代の流れじゃろうか?縮小均衡の時代かも知れん。

今一番気になる事は、高知県の人口は約70万が50万人に減るがぜよ。
子どもの減少が進み、教育現場の変化や、仕事の後継者不足の話があちこちで聞こえる。市民に愛された桂浜公園の土産物店や駐車場周辺の整備計画が動き始めた。「桂浜荘」も高知市は指定管理で運営を切り替えると聞いたがなかなか難しいのう。

観光の形態も変わっていく中で、銅像のわしとしても、喜び満足してくれる桂浜公園であるように祈りよる。「高知県立坂本龍馬記念館」や桂浜水族館の今後についても愛され世界に羽ばたくよう皆さんの知恵と工夫で応援を頼むぜよ!

コラム・龍馬のこと

「龍馬のような、大きな人に」

京都府立大学文学部歴史学科１回生
依田　萌奈

初めまして。昨年3月に現代龍馬学会に新たに入会いたしました、大学1回生の依田萌奈です。龍馬さんのことをもっと勉強して知りたいと思っています。これからどうぞよろしくお願い致します。

最初に、龍馬さんと私の出会いについてお話ししたいと思います。私は四国出身である上に、一番下の弟の名前を龍馬さんのお名前にちなんで「竜真（りゅうま）」と名付けるほど龍馬さんのことが大好きな両親のもとで育ったということもあり、幼い頃から龍馬さんを身近に感じていました。小学校高学年から司馬遼太郎氏著『竜馬がゆく』を読み始め、龍馬さんの人間性やその行動力に魅了され心酔していきました。

大学受験期は大変でしたが、龍馬さんを愛する高知出身の方から龍馬さんの写真パネルを頂き、勉強机の前に立て掛けて常に龍馬さんに見守ってもらい、心が折れそうな時は龍馬さんの熱い志を思い出して「自分も夢に向かって精一杯努力しよう!」と決意を新たにし、モチベーションにしていました。

龍馬さんのことを「人たらし」と表現したものをよく目にしますが、龍馬さんの人を引きつける力は、今を生きる私にもたくさんの方々とのご縁をもたらしてくれているように思います。本学会への入会を勧めてくださった前田由紀枝先生はじめ龍馬さんの話題で語り合った人々や先日龍馬さんの足跡を求めて、初めて1人で旅に出た長崎の地でも龍馬愛あふれる多くの素敵な方々と出会うことができました。龍馬さんはやはり人物だとひしひしと実感しています。

最後になりますが、そのご縁に感謝しつつ志を大きく持って、龍馬さんに少しでも近づけるように自分なりに夢に向かって走り続けようと思います。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp